

# フィールドワーク実践に関する考察

中山 昭 則

## I フィールドワークの教育的効用

### 1. はじめに

フィールドワーク（現地調査、以下FW）の重要性については、地理学および歴史学のみならず文化人類学や社会学などでも多くの指摘がなされている。そもそも、このFWというものを基本的調査技法として確立させたのは、文化人類学者のマリノフスキーといわれている。彼以前の文化人類学は、人類進化の図式や文化伝播の歴史に捉われ、原尻（2006）の言を借りれば「現地の状況を現地の次元で認識するという考え方は研究者にも共有されていなかった」ことになる。当のマリノフスキーはFWについて「民族誌学の野外調査の第一の根本的な理想は、社会構造の明瞭で確実な輪郭を描き、すべての文化現象に関し、見当違いな解釈を排して、法則と規則性を確立することである」と述べている（マリノフスキー、1969）。

彼のFWの方法は自然科学とは別の方法によるものと理解されている。それは今日クリフォード・ギアツが用いた「解釈学」とよばれる手法である。ギアツはフィールドデータをテキストとして捉え『厚い記述』という用法で知られるとおり、個と全体の関係を読み取っていった（C.ギアツ、1987）。即ち「全体的アプローチ」と呼ばれるものである。これは、人間理解のために部分的なアプローチは避け、人々の生活全体から社会・文化を理解する方法である。確かに、部分的なことにアプローチをかければ人々の生活の重要な部分は理解できるかもしれないが、そのアプローチは対象とする人々にとって重要なものなのかどうかは不明確である。「研究者たちの関心ごと」という視点からアプローチをかけて本当にそこに暮らす人々を理解したことになるのであろうか、甚だ疑問である。全体的アプローチという概念は、当事者を理解する上では欠かせない考察対象を、当事者たちの生活空間全体から絞り込んでいくものであり、時としてそれは当事者たちにとっては「ごく当たり前の事象」になることもある。

さて、別府大学地理学研究室では毎年フィールドワークを欠かさず実践している。地理学にとってFWは必須アイテムであることは誰でも理解できるであろう。また、筆者は曲がりなりにも以上説いてきたことを念頭に入れて指導してきている。しかし、本稿はその成果を検証することを目的とはしない。

ここでは、FWを通して格段に成長していく学生たちの姿を前にして、FWの持つ教育的効用について検討することを目的としたい。

## 2. フィールドワークとは

当然のことながら、FWは研究目的達成に向けた調査手順の一段階である。では、なぜFWを実施するのであろうか。単なる現場の状況把握のためなのか？携わる人々の意見聴取だけなのか？確かにFWそのものは研究手順の一段階であり、研究という大枠の範疇で捉えるべきである。しかし、既に述べたとおり、FWの実践によって学生たちは、まず人間として更に磨きをかけている。その上、今後の研究意欲が格段と高まっている。つまり、FWの実践は研究室の実績を上げるという現実的な効用とともに、学生個人にとっても自己の潜在的能力の認識と開発意欲、コミュニケーション能力の開発に大きく寄与しているのである。

FWにおける個人への聞き取りは、聞き取り相手「その人個人」についての理解を目的としているのではない。その目的は調査対象となる限られた社会・文化・歴史・空間についての理解を深めることにある。したがって、聞き取り相手を通して、その人が属する集団全体を理解することが目的といえる。つまり、その人からの聞き取りによって、背景にある社会・文化・歴史等を分析しなければならない。

自分たちの「聞きたいことを聞く」という動作は誰でもできるであろう。例えば、交番で道を聞くことは決してFWにはならない。FWは「相手のことを理解するためにお話を伺う」ことなのである。そのためには、まず聞き取り相手の方が我々に対して関心を持ってもらうことが必要となる。

では、聞き取り相手の方が我々に関心を持っていただくために、我々はどのように対応すべきなのか。

一つには、真摯に話を伺うことであり、更にコミュニケーションを大切に相手への理解を深めることである。さて、「真摯に話を伺う」とはどういうことなのだろうか？前出の文化人類学者である原尻英樹氏は『自分の持っている論理的能力、他者との共感能力、それに感性をフルに動員(引導)して、自分のもっているすべての能力を使って、相手の理解のために努力すること』と指摘している(原尻2006)。ということは、FWを実践するにあたってしなければならないことは、学生たちにその論理的能力・共感能力・感性を自己の能力の一部として定着させることである。

次いで、コミュニケーションについて考えてみる。広い意味でのコミュニケーションとは、快適な人間関係の構築といえる。現代社会において一般的に考えられているコミュニケーションとは、「単なる話し相手」そして「情報交換」のことであり、自身にとって心地よい相手や情報を共有する集団が「望ましい社会集団」となっている。しかし、FWで求められるコミュニケーションとは、全くの初対面の人と良好な関係をつくることであり、その能力が必要とされるのである。こうした能力の形成には、「自分の経験を具体的に語ったり」、「他者からのこうした話を理解したり」、「自分と他者とを相対化する」姿勢と、その対応力ならびに適応力が必要不可欠となる。

しかし、こうした能力の開発に立ち足るものとしてここで指摘しておきたいのは、今日の学生たちは案外ナルシズム(自己愛)傾向が強いということである。程度の差はあるものの「自分は既に完成している」と思い込んでいる学生は多いように見受けられる。つまり、史学科や文化財

学科にやってくる学生たちは、高校の現場では「歴史好き」で「歴史に秀でている」と自他ともに認められてきた、あるいはそう思いこんでいた者が多いのである。まずは「自分はまだ学ばなければならぬことが多い」ということを自覚させる必要がある。しかし、それにはかなりの時間とエネルギー、そして大学における組織だった初期教育が必要となろう。

### 3. F Wそれは全人教育

大学に入ってきた学生たちに、まず教えなければならないことの一つとして「高校までの学校教育と大学における学問(教育)とは根本的に異なる」ということであろう。つまり、「高等学校までの学校教育における学習・思考方法では学問は理解しにくい」ということを、如何に早く認識させるか、である。

学校教育は基本的には「何の目的で学ぶのか」について考えなくても、当面の受験・就職対策をすることによって健全な学校生活は送ってしまうのである(場合によってはその方がより健全な生活なのかもしれないが…)。したがって、先生の話などは「先生は何の目的で、なぜ、どういう意味でこのことを話しているのか」という、学問においてはごく原則的な疑問は不必要ともいえる。更に学校教育では「全員一斉」が基本とされる場面が多い。

しかるに、「考えること」を習慣づけられていない学生に対して、無論『考えろ』と言ったところで大きな進展は望めない。「考えること」の第一歩は「自分の認識では理解できない世界」のあることを知らしめることと考える。かつての大学教育は、入学早々その壁に直面させていた。一般教養科目がそれである。筆者も入学早々哲学の講義で、いきなり「実存の告白」などと言われ、まさしくショック療法的な荒治療によって学問を肌で感じたことを覚えている。

今日の若者たちは、メールによる“情報交換”がコミュニケーションだと思い込んでいる。『解らなければ考える』という、人としてごく基本的でしかも自己の存在を認識すべく経験よりも、即効性を重視する。さらに、脈絡の中で論理を導き出す前に短絡的な解決策を選択し、劇場的な刺激に反応する。つまり、原尻がいうように『自ら考える前に感覚で反応してしまう』のである(原尻2006)。

このように、考える前に感覚で反応する学生たちにとって、F Wはかなりの効力を発揮する教育プログラムと考える。なぜならF Wは「人の話を聞き」、「その話と話者の背景にあるものを探り」、「研究目的とのすりあわせを行う」といった手順を否応なしに踏まなければならないからである。加えて、学生による直接体験と新たな経験をも提供する。まさに全人教育そのものではないか。

### 4. 学問的思考形成への寄与

さて、F Wを経験すると今度はその成果をまとめなければならない。F Wのまとめは当然のことではあるが、「見て来て良かったまた行きたいな」的な感想文ではどうにもならない。研究としてのまとめが必要となろう。そこで、まず今取り組んでいる研究そのものが、その分野の学説史の中

でどのように位置付けられているのか考察しなければならない。そのためには「研究目的」の設定と理解は不可欠である。「目的なきFW」は成立しない。

その学問領域を成立させてきた学説と、それを展開してきた先行研究、そして、これら学説のもとになっている考え方を学問体系という。したがって、自己の経験だけに基づく感想や日常的な意見を述べることは根本的に異なる。学問的手続きに則った話の展開が必要になる。

今日の学生たちは、卒論研究でこの学説史を紐解くことにとりわけ苦労する。先行研究の必要性と重要性をいくら説いてもピンとこない（伝え方に問題があるのだろうか）学生が何と多いことか。「論拠もしくは根拠の全くない話をしている」ということを強く自覚していない。つまり、自己の研究にすら真摯に向き合えないという事態に陥ってしまっているのである。

さらに、自己がこれから実践しようとする研究は、その領域の中でどのような位置づけにあるのか、という認識も持たない。研究における見解は、全て学説の中における相対的な枠組みの中から形成されるべきものである。FWは常にそのことを認識しておく必要性があり、そのことが大きな教育的効果をも生み出すものとする。

FWのもう一つの教育的効用は、学生の「自学能力の開花」に繋がる可能性を秘めている点にあると考える。先にも述べたとおり短絡的な解決策を選択しがちな学生にとって、FWは実体験を通して物事を考える絶好の機会を与えるのではないか。では、その自学とは何かであるが、これに関して地理学者の千葉徳爾の言は参考になろう。千葉は民俗学を修めるために柳田国男の書齋に出入りしていた頃、恩師に質問を投げかけると、師は解答を引き出さずに常々「千葉君〇〇の本は読んだかね。その本のあの辺りに書いてあったはずだが…」と言われたそうである（千葉1999）。学問の世界の最末端にどうにか居を許されている筆者などは、全く次元の違う指導方法である。

考えてみれば、筆者の研究室を訪ねてくる（日常的にやってくる室員は除く）学生であるが、かつては部屋の書物を舐めるようにじっくりと見廻す学生が結構いたのであるが、最近はめっきり少なくなっている。直接関係のない学問領域に対して殆ど興味を持たないのであろうか。それとも単なる遠慮なのか？

## II 研究室活動とFWの実践例

### 1. FWと研究室

実際にFWの実践指導となると上手くいかないことばかりで、毎回試行錯誤の繰り返しである。このような中で着実に成長している学生を目の当たりにすると、彼らの努力に只々頭が下がる思いである。

筆者はFWを実践するにあたって、事前の聞き取り内容の検討、聞き取り相手へのコンタクトなどについては指導を行っているが、現地における聞き取りの実践については、事前には殆ど指導をしていない。一つには予め台本など用意しておく、不慣れた学生たちはそれを棒読みしてしまう可能性がある。確実に聞き取らなければならない項目は事前に指導しているので、あとはできるだ

け我々の調査に興味・関心を持ってもらうために、アドリブでこなすよう指導している。また、言葉遣いや身なりについては何ら問題ないのが別府大学生の良いところである。学生たちも最初は緊張しているが、慣れてくると筆者などより上手に聞き取り相手の方と溶け込んだりもする。

これは、日常的に大学院生と研究を共にしている中で培われた部分が多いものと自負している。やはり、学問をする環境はいわゆるタテ社会も必要な場面が多いと考える。とりわけ、年齢の近い経験者からのアドバイスが受けられるという環境は得難いものである。加えて、研究はたとえテーマが変わっても、その手法・手順等は普遍的であり、その経験と蓄積はタテ社会の中で継続していくのである。このようないわば伝統を作り上げると、先輩からアドバイスを貰う立場の室員も、やがてはアドバイスをする立場になることを自覚する。常に先輩と将来の自分とをダブらせて相対化することで、学問への意欲と自信を持つことができる。

地理学研究室は当然のごとく「勉強するコミュニティ」であるが、FWを介したコミュニティ形成をひとつの活動目的としている。テーマ・場所は変わっても毎年FWは実施する。院生諸氏は「テーマと事例地」を睨んで「これまでの実践例」から有益な部分を切り取って話してくれている。これによって学部生は、目前に迫ったFWに対する具体的なイメージを形成し、適度な緊張感を持つことができる。

## 2. テーマ設定と事前研究

研究室では、例年年度の研究テーマを設定している。その設定に当たっては顧問(筆者)が先導している。何故ならば、ほとんどの室員諸君は調査・研究というもの自体初めてのことであり、このような状況下で好きなテーマを選ばせることは「研究というものを体験させる指導」を行う上で疑問符がつくと考えるからである。そこで、毎年顧問が実行可能なテーマを幾つか提示して選ばせている。

そこで2006年度の事例をみていく。室員たちは提示されたテーマの中からまず大テーマとして『グリーン・ツーリズム』を選択したのであった。次に、文献の検索と講読に当たらせる。その中からグリーン・ツーリズムの一方策として「棚田オーナー制」があり、全国的に展開していることに学生たちの関心が集まった。ここからFWの事例地選定に入るのであるが、当然「棚田オーナー制」は何処から始まったのかということになり、高知県橋原町であることを突き止め、此処ならば距離的にもFWに行けるということで、テーマと調査地が決まった次第である。

事前研究は、先行研究(研究史)の吟味と調査地の事前学習を行なう。先行研究の吟味は、自分たちが設定したテーマの学説的な位置づけを考えさせるためである。この作業をするうちに「学説に則った研究の展開」を学ぶことになる。今回は、まずグリーン・ツーリズムに関する地理学分野での研究動向を吟味させ、この分野の研究がどのような考え方のもとで蓄積されてきているのか考察させた。更に棚田オーナー制の全国的動向を調べさせ、今回の調査地の位置づけを考えさせた。こうした作業から、今回の研究の意義と問題の所在を浮かび上げらせ、研究目的を設定させた。

また、調査地に関する下調べも毎年させている。その理由は、人口動態・産業構造などの統計データを利用しての調査地把握は事前しておくべきであると考えからである。つまり、FW本番で現地の方々に「この町の人口は何人ですか？」などと聞いたら、「そんなことも調べていないのか」と当然なるわけで、この時点で我々調査チームの評価とイメージが決定的なものになってしまう。加えて、事前に調べられる事項のためにFWの貴重な時間を割くのはもったいないからである。

### 3. 予備調査と本調査

予備調査は、例年可能な限り顧問が出かけることにしている。そこで役場などの行政機関、地域の代表者等とコンタクトをとって下準備をする。さすがに『ぶっつけ本番』では顧問・学生ともどもリスクが高すぎる。研究テーマと調査の趣旨を予め説明し、慣れない学生が調査に入ることを知らせておく方がことは円滑に運ぶと考えている。

この予備調査で本調査の輪郭がほぼ出来上がるので、顧問としては気を抜くことはできない。一番緊張するのは、地域の方々に調査の趣旨と学生たちがお邪魔することを説明する時である。大抵の場合は「学生の勉強のための調査が主目的」と説明すると、安心して協力して頂ける。当然のことであるが、地域の方々は「自分たちが住む地域がどのような形で公の場に出してしまうのか」という点に対してとてもナイーブである。我々もかつて苦い経験をしたことがある。それは、我々が調査に入る少し前に、他大学の調査が入り地域住民はそこで不快な思いをされたようであった。我々に対しても敏感に反応され、聞き取りの時『居留守や直接断る』方々が多く、学生たちが落胆した経験を持つ。

2004年度の宮崎県椎葉村と2006年度の高知県榑原町の予備調査では、地域の方々から全面的な協力を頂いた。地区内をくまなく案内して頂くとともに、地区の世話人の方から地区の方々に直接調査の協力をお願いして頂くこともできた。さらに、本調査までの間に質問票やアンケートの配布と回収までして頂いた。その上、役場と地域のご厚意によって、調査地内にある宿泊施設を廉価で使わせていただくこともできた。そのお陰で、重要伝統的建造物群保存地区ならびに棚田の真ん中で寝泊りするという、得難い経験もできた。

また、予備調査の段取りによって貴重な史料の閲覧と専門的な聞き取りも実現してきた。幾つかの調査地では、役場のご厚意によって明治時代の地籍図の閲覧が許された。これは学生にとっては大変貴重な経験になったはずである。聞き取り調査においても、地域の方々への聞き取りは勿論であるが、地元で専門的な知識と経験を持つ方々からの聞き取りも実現させてきた。例えば、旧国鉄職員の方からは機関士としての専門的なお話を伺うことができたし、郷土史家の方からもご教示を受けたことも多い。

さて、顧問が予備調査から戻ると、学生たちにその報告を行い、次いで何をすべきか考えさせる。2006年度の事例でみると、学生たちの協議によって、聞き取り調査の趣旨と質問項目を事前に送付して本番に臨むことにした。試験を挟んで8月上旬までにこれらの送付を完了させた。さらに、

班を二つに編成し、各班担当農家を決めて予備調査で入手した情報・データをもとに、班ごとに聞き取り調査の準備をさせた。

いよいよ本調査の日を迎えるわけであるが、当研究室ではこれまで8回のFWを実践しているが、FWとして何とか体裁が整ったのは最近5回のFWではないか。諸先輩たちに対して大変申し訳ないことであるが、最初の頃は顧問の力量不足である。

最近5回のFWとは、すなわち2003年度の玖珠町、2004年度の宮崎県椎葉村十根川地区、2005年度別府市鉄輪地区、2006年度の高知県梶原町神在居地区の調査、2008年度の豊後高田市田染地区の調査である。これらの調査では各地域の方々から全面的に協力を頂くことができ、充実したFWが実践できたと考えている。

2004年度と2006年度の調査では、ともに集落のほぼすべてのお宅から聞き取りを行うことができた。班によっては食事や酒肴まで振舞って頂いた。学生諸君には「世の中には見ず知らずの若者に対しても丁重にもてなしてくださる方がいる」ことを知っただけでも大変な勉強である。2003年度の調査では旧国鉄職員の方から貴重な体験談を伺うことができ、「鉄道の町」の復原に役立てた。2005年度の鉄輪調査では旅館組合の協力を得て、数件の旅館にアンケート用紙を置かせて頂くことができた。アンケートのお願いと回収は全て学生たちによって実践させた。

#### 4. 実践例

では、実践例として2006年度ならびに2008年度の調査を中心として述べてみたい。

2006年度の調査は「棚田オーナー制」をテーマとして、前述のとおり高知県梶原町に9月20日から23日にかけて3泊4日の行程で実施した。学生たちも調査自体のイメージはかなり出来上がっていたが、地域のイメージはできていない。案の定、トンネルをくぐり細い脇道に入り、棚田が姿を現すと学生たちは一斉に歓声をあげた。こんな純真な学生たちを見ると「連れてきてよかった」とつくづく思う。学生たちにとっても、半年以上にわたって学習を積んできたいわば『憧れの地』である。また、別府からフェリーと車で半日かけてやって来ただけに、期待感も高まっていたことであろう。

現地には役場に挨拶に伺ってから行った。そして荷物を整理して「ふるさと千枚田会（棚田オーナー制実行委員会）」会長宅に挨拶に伺い、その場で今後のスケジュール確認をする。FWには「相手次第」という“醍醐味”はつきものである。早速変更点が幾つかある。臨機応変に対応するしかない。この夜はちょうど会合があるとのことなので、顧問が挨拶に伺う。寄り合い後何人かの方が宿舍まで訪ねてきて下さる。歓迎ムード一色という雰囲気、学生たちも緊張とやる気が一段とみなぎってきたようである。

調査そのものは、質問票の送付が功を奏したのかとてもスムーズに運んだ。色々な資料や写真を予め準備してくだっていた農家もあった。聞き取りのスケジュールは、質問票の送付とともに希望の日時と場所（自宅に伺うのか宿泊先にお出で頂くか）を返送してもらっていた。聞き取り調査は

早速初日の夜から始まった。2日目と3日目の日中は棚田の観察と農作業に出ている方々への聞き取り調査に充てた。それは、大半の方が聞き取り時間として夜を希望していたからである。しかし、その多くの方々も日中は畑にでているので、初日の聞き取り以外は、既に顔見知りになっていたケースも多かった。

最後の夜には、これまでのお礼と学生の社会勉強の意味も含めて、地域の方々を宿泊先にお招きして、ささやかではあるが食事会を開催した。地域の方々と役場の方20名以上の人々に集まっていた。日頃は仲間内でしか飲んだり食べたりしたことのない学生にとっては、またとない社会勉強となったことであろう。その上、参加して下さった方々も大変喜んで下さった。

このFWは2つの点で大きな収穫があったと考えている。1つは当然のことながら調査としての収穫である。ここにはFWの技量向上も含まれる。更にもう1点は、地域の人々との触れあいである。学生たちは本当に多くのことを学んだと思う。今回は教育的効果を最大限発揮したFWであった。

次に、2008年度の調査は「文化的景観」をテーマとして県内の豊後高田市田染地区を選んだ。この調査は顧問が関わっている委託調査の一環をなすものである。調査自体は日帰り可能なので何度か足を運んだ。6月8日（日）には「御田植祭」に参加し、オーナーの方々から聞き取り調査を実施した。さらに9月5日（金）・6日（土）には文化的景観に関わる住民説明会を開催した。この調査は文化的景観というものに対して地域住民はどのような認識を持っているのか分析するものであった。7～8月には市の担当者および地元自治区の方と何回か打ち合わせをおこなった。説明会当日は30名を越える住民の方々が参加して下さった。ここでは文化的景観に対する厳しい見方や意見も出され、日頃は文化財を肯定的に捉えながら学習をしている学生たちにとって「もう一つの現実」に直面することになった。その一方、後半の聞き取り調査では住民それぞれが知る「昔の様子」を熱心に語ってくださり、何人かの方々は翌日も聞き取り調査に応じて下さった。

この調査で、学生たちが「自分たちは良いものだと思っている事象も多様な見方をされている」という現実を直視できたことは大きな収穫である。いわゆる「世間の広さ・多様性」を肌で感じたはずである。また、地区内に点在する農家民宿に分宿し、夜はそこで聞き取り調査も実施した。

### Ⅲ. おわりに

以上、毎年実践しているFWについて考えてみたわけであるが、今考えるに、学生たちとFWを重ねていくうちに、筆者自身が一番学ぶべき点が多かったのではないかと考えてしまう。正直なところFWがこれ程までに教育効果があるものとは認識していなかった。地理学研究室が発展するにつれて、筆者の至らない点ばかりが目につくようになってきてしまった。

確かにFWは、指導者にとっても緊張するプログラムといえる。現場に行ったら学生たちは筆者の行動を見逃さずに見つめ、それを手本にして実行に移すからである。果たして、現場での筆者の姿を室員たちはどのような眼差しで見つめているのであろうか？恐ろしくて聞けないのが正直な処である。『日々鍛錬』これが今の筆者に与えられている天命なのかも知れない。



これまで当研究室が実施した現地調査にご理解を頂き、快く協力して下さった方々に心より感謝し、この場を借りて御礼を申し上げたい。

最後に、別府大学地理学研究室は2008年11月末日をもって「別府大学史学研究会学生部会」から退会しました。これは、顧問中山が新設の国際経営学部へ異動するためです。当研究室の発展は諸先生方からのご指導と各研究室と切磋琢磨した賜です。当研究室をここまで育てて下さった先生方ならびに学生部会に深く感謝申し上げます。国際経営学部においても、研究室を立ち上げ学生部会を目標として、学生たちの探求心の向上と研究レベルの底上げに努めていきたいと思っております。また、研究室活動が全学的に広がることを想定し、その受け皿として態勢を整えたいと思っております。

【注】

本稿は地理学研究室「研究年報第5号」(2007年3月発行)に掲載した文章を加筆修正したものである。

【文献】

原尻 英樹 (2006) : 『フィールドワーク教育入門』 玉川大学出版部。

千葉 徳爾 (1999) : 『地理と民俗への道—自学のすすめ—』 大明堂、52-53頁。

B. マリノフスキー (1967) : 『西太平洋の遠洋航海者』 中央公論社 (世界の名著59)、78頁。

C. ギアツ (1987) : 『文化の解釈学』 岩波書店。

別府大学地理学研究室 : 「研究年報第5号」 2007年3月、66-71頁。